

ほうほう
方法

立地に適した樹種の選定と組み合わせ

樹木は1本の力で大きくなるのではなく、隣り合う樹木と関係性を持ちながら大きくなっていきますので、この関係性を大切に植え方を考えています。

植樹する苗木には、すべて役割があります。生長が早く、寿命の短い「先駆種」(高木のウリハダカエデ、リョウブ、低木のムラサキシキブ、ヤブウツギなど)が直射日光や強風を遮り、生長が遅く、寿命の長い遷移種・後期種(モミ、アカガシ、イロハモミジなど)が生育するための環境をつくります。

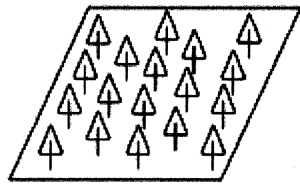
亜高木※と呼ばれる高さ15メートル程度まで大きくなるヤマボウシやウリカエデなどと、高さが6メートル程度までしか大きならない低木のコバノガマズミやカマツカなども一緒に植樹します。これによって、高さ方向に様々な樹木が育つ多様性の高い森へと導きます。

※ 亜高木: 高木と低木との中間の高さをもつ樹木。

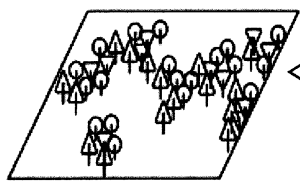
不規則な植え方

植樹では、規則的な植え方をしません。樹木の特性と植樹場所の条件を考えて、不規則に植えていきます。また1本1本植えるのではなく、集中的に植える場所を作っています。

一見でたために植えているようにも見えますが、これは樹木のもつ自形性※1と他形性※2の性質を見極めて考えた設計によります。この方法によって、自然に近い安定的で持続性の高い森を作ることができます。



スギ・ヒノキの人工林(規則的)



多様性の高い森(不規則)

不規則な植え方
・場所の条件にあわせて樹木を選ぶ
・異なる性質の樹木を組み合わせる
・他の樹木が生育できる場所をつくる

※1 自形性: 周辺の環境にあまり左右されず、まっすぐ上に生長する性質。

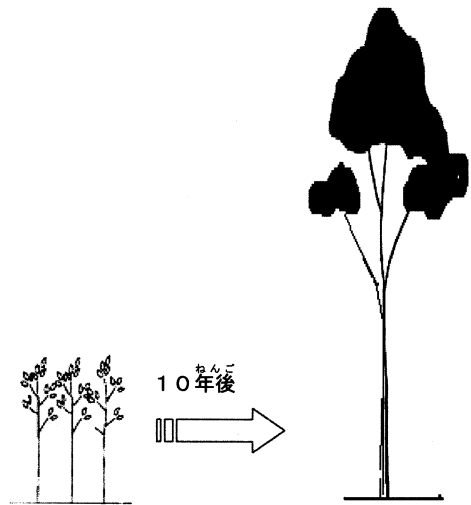
※2 他形性: 周囲の環境に合わせて樹形を変えて生長する性質。

巣植えによる初期生長の促進

苗木は、3本1組での植樹を基本とする「巣植え(数本を密植)」という植え方をします。巣植えをすると、早く上に伸びようとする性質を発揮させることができます。また微気象条件を緩和し菌根※の共有を図ることもできます。これにより早く樹林化することが可能になります。

巣植えは、大きな苗木を植えるよりも効果が高いと考えられていて、費用も抑えることができます。樹種や木の特徴によっては、巣植えを行わないこともあります。

※ 菌根: 植物の根の中に侵入して共生し、互いの組織を入り組ませた菌類。植物がつくる養分と土の中の養分を交換するなどの役割がある。

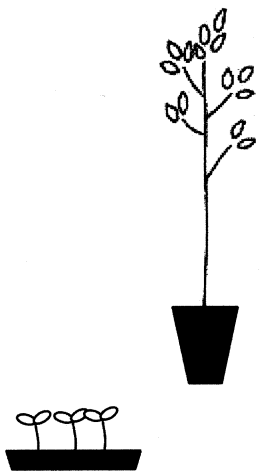


ちいせいなえぎ しょう
地域性苗木の使用

植樹では、地域生態系を保全するため「地域性苗木」を使っています。地域性苗木とは、植樹する地域の近くで採取された種から作られた苗木のことです。同じ樹種でも、育つ地域により、長い年月をかけて自然が作り上げた遺伝構造は異なります。

生態系保全という観点からは、できるだけ植樹場所に近い地域で採取され育てられた苗木を使うことが望ましく、遺伝子攪乱※の防止に役立つとされています。

多気郡大台町では、地元の生産者による大台町苗木生産協議会が種子を採取し、約3年かけて育苗しています。現在、約130種類、4万本の苗木を育苗しています。



※ 遺伝子攪乱: 長い歴史で形成されたある種の遺伝構造や遺伝的多様性が、人為的に持ち込まれた個体との交雑によって乱されること。
(「広葉樹の種苗の移動に関する遺伝的ガイドライン」森林総合研究所より抜粋)

新たな さいく
新しいシカよけ柵(パッチディフェンス)

多気郡大台町ではシカの被害が深刻で、森林が急激に衰退しています。そのためシカが苗木を食べないように保護する柵が必要です。大きな柵で植樹地を囲む方法ではシカの侵入を防ぐことは難しく、苗木を1本ずつ保護する方法にも問題があります。そこで、シカに「檻」と思わせるように小さく囲むことで侵入を防ぎ、効果を上げています。これはシカの生態的な特徴を利用した方法です。

